



令和8年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 5 号
令和8年8月26日

学校教育目標 主体的に生きる人間の育成 《意欲・健康・豊かな心》

2学期に思う

校長 竹本 久子

入道雲にのって 夏休みは いってしまった

「サヨナラ」のかわりに すばらしい夕立をふりまいて

けさ 空はまっさお 木々の葉の1枚1枚が あたらしい光とあいさつをかわしている

—高田敏子 「忘れもの」 より抜粋—

夏休みが終わりに近づくと、毎年思い出す詩があります。それが上記の一節です。まだまだ残暑厳しい日が続きますが、雲は真夏の入道雲から秋の初めのうろこ雲が見られるようになり、日が暮れる時刻も早くなり、一步ずつ季節の移ろいを感じることができます。今年度も夏季休業日が終了し、2学期が始まります。学校に戻ってきた生徒たちの顔を見ると、大人に近づいてきた表情、日焼けをした肌や背丈が成長した姿が多く見られ、39日間という時の経過と若葉のように成長する生徒たちの力強さを頼もしく感じております。それぞれの生徒が自分自身の目標とともに家庭で、地域で、部活動や個人活動等で充実した毎日を過ごしたと思います。

さて、2学期は1年間の中でも1番授業日数が長く、晩夏・秋・初冬と3つの季節の中で生活することとなります。2学期は、よく「サンドイッチの具」に例えられることがあります。1学期と3学期をパンとすると、2学期は具にあたり、美味しいサンドイッチを作るための重要な時期であります。ただ、「美味しい」とは、人それぞれ好みがあります。1つの素材のよさを生かすのもよいし、色々と栄養バランスを考えたものもよい。時にはデザートのような甘い具も忘れられない逸品となりそうです。土呂中生一人ひとりが、自分なりの「美味しい具」を目指して、切磋琢磨しながら仕上げていくのかと考えると、これからの日々が楽しみであり、活躍を期待して止みません。保護者の皆様並びに地域の皆様には、引き続き温かい御支援と御協力をお願い申し上げます。2学期、転出入があり、新しい土呂中としての日々が始まります。土呂中生として今を生きることは本当に奇跡であると思い、最後にもう一つ、詩を紹介いたします。

不思議だね、ここにいること。同じ時間の中で生まれて、ここで、こうして出会えたこと。

こんなに広い、星の上で、こんなに、近くに生まれたこと。

もし、この出会いが、神様のホンの気まぐれでも。

教室で、机を並べてるみんな、帰り道、すれちがう人たち。

隣で笑ってるあの子。幼なじみのあいつが、

とても、不思議に、トクベツに見えた。

—折原みと 「不思議」 —